

ひかんでいと
比観亭跡

—水戸藩の景勝地—



さかつらいそざき

比観亭跡は、ひたちなか市の東部、磯崎町の阿字ヶ浦海水浴場や磯崎漁港を眼下に望む台地に位置し、酒列磯前神社の参道入口より県道をはさんで反対側の高台に所在しています。

寛政2(1790)年11月に、水戸藩6代藩主徳川治保公はるもりは水戸に帰国し、湊村から海岸沿いの平磯や磯崎を訪れました。酒列磯前神社の神主の屋敷を訪れた際、屋敷東方の高台から海岸風景を眺めたところ、眼前に広がる大海原と白砂青松の眺望が素晴らしかったため、この高台に「お日除け」(あづまや)を建てることとし、自身で9尺四面の土地を画して建設を命じました。「比観亭」と名付けられたあづまやは、翌寛政3年に建設され、屋根は草葺しょうこうかんといたちはらすいけんう。また、彰考館総裁の立原翠軒ながくぼせきすいが「比観亭」の額を書き、これを桜の板に彫刻した扁額が亭に掲げられた。

この建設に合わせて、治保公は長久保赤水ながくぼせきすいに「比観亭碑文」の撰を命じたが、その碑は建てられなかった。治保公は比観亭の「記」を命じたが、赤水は「碑」と聞き間違えたといふじたゆうこくい、碑文は藤田幽谷が作成(代作)したという。

あづまやは現在は残っていませんが、「比観亭」のあった場所からは、晴れた日には東海村方面に続く阿字ヶ浦の白い砂浜あぶくまやはるか阿武隈の山地を望むことができる景勝の地です。昭和43年1月に市指定史跡に指定されています。